

本当にある「うなぎ文」「こんにやく文」

「ぼくはうなぎだ」に代表される、「一は一だ」という形の表現をうなぎ文という。「うなぎ文」は言語学者の金田一春彦氏がその構文の特異性をとりあげ、1978年にうろしお出版から発行された奥津敬一郎氏の『「ボクハ ウナギダ」の文法』で有名になりました。「ぼくはうなぎだ」をそのまま直訳すると「I am an eel」実は自分はウナギであると告白しているのでしょうか？そうではありません。食堂で注文を聞かれて、「私、親子丼」「じゃあぼくはうなぎだ」 飲み屋に行って注文を聞かれて「俺、ビール」「私はレモンサワー」といった会話は日本中で、当たり前のように繰り返されています。私たちの日常会話は、外国人には理解不能な日本語が多いというのは事実です。

「こんにやくは太らない」も英語で直訳すると、「Konnyaku doesn't grow fat.」となります。これでは、こんにやく自体が太らないみたいになってしまいます。本来言いたかったことはもちろん「こんにやくは、いっぱい食べても太らない」という意味です。

先のこんにやく文はうなぎ文と「主題なし+補語なし基本文」という点で共通しています。日本語は「主題優勢言語」と呼ばれ、主語は必ずしも入りません。それに対して英語は「主語優勢言語」であり、そもそも文法構造上がまったく違います。そうした言語構造の根本的な違いを意識せずに、通訳ツールを使い、外国人に「自然な日本語」で話をして、外国人は、あなたの言うことをチンプンカンブンになっているかもしれません。「I am an eel」「Konnyaku does not grow fat.」と言われていたと思えばご理解いただける話だと思います。通訳ツールは万能ではありません。日本人が自然な会話を、そのまま通訳ツールにかけた場合、恐ろしい「迷文」となって外国人に伝わる場合があることを、日本人はまず理解しなければいけません。

AI通訳ツールを使いこなすために必要な、私たちの正しい日本語

「米Appleの「Siri」、米Amazon.comの「Amazon Alexa」、米Googleの「Google Assistant」NTTドコモの「my daiz」が出てきて、私たちは、スマートフォンや、AIスピーカー等の機械に話かける機会が増えています。しかし定型文ははずれた質問をすると、またはずれな返答をされることが多いようです。そこには音声認識の問題もありますが、実は1番の問題は話者が、「AI翻訳システムが求める日本語」を話せていない場合も多いと推測しています。

Google翻訳を使い続けていますが、2017年ぐらいからGoogle翻訳の精度が劇的に向上していると実感しています。ニューラルネットワークという、機械学習で使われるアルゴリズムで、文章をパーツごとではなく、自然な文の流れとして解析、翻訳するようなシステムに切り替えたそうです。AI翻訳のおかげで今までは比較にならないレベルに翻訳精度はパワーアップしています。そのためか、海外旅行先のあちこちで、スマホのGoogle翻訳で、英語ではなく、日本語音声で現場対応いただくことが増えました。少し前までは難があった「音声認識・音声合成技術」「翻訳精度」が実用レベルに達したと、世界中の人が認めているのです。リアルタイム通訳ツール、スマートフォンの通訳アプリを活用した外国人対応は日本人だけの専売特許ではありません。気づいた人から、利用するように世界中が変わっています。今後、日本でも通訳ツールやスマホの通訳アプリ活用が、ビジネス局面でも加速することは間違いないと筆者は確信しています。

外国人へのやさしい日本語、そのために必要な日本人が学習すべきAI 翻訳語とは？

今まで日本人は、外国人にN1、N2等の高い日本語能力を求めることで、しのいできました。しかし今後人口減少で迫り来る圧倒的人手不足の時代に、この方法は有効ではありません。そうした日本語能力の高いレベルの人はごく限られた数の人しかいないため、すべての業種、すべての職場で、日本語を話せる人だけで社会が成り立つようなコミュニティづくりを模索することは時代錯誤となりつつあります。

正しい日本語、やさしい日本語を話すことで、AI 通訳ツールを使いこなせるスキルを身につけることが今後より重視されるようになります。筆者はGOOGLE翻訳（日本語→英語）を使う際に、2度、3度日本語を書き換えて、自然な英語になったというレベルにしてから相手に提出するようにしています。「抜けている主語を足す」「主語を足すことにあわせて、目的語、述語を書き換える」「短文、シンプル、やさしい日本語に」等々。このあたりは、翻訳ツールを利用している日本人のみなさんにとって実は当たり前のようにみなさんしている前工程の作業のようです。気づいた人から、当たり前のように実践しているテクニックです。

私たちは話し言葉としての日本語以外に、「敬語」そして今後は「AI 翻訳語」のスキルが必須な時代になると、今回講演をお願いしているやさしい日本語ツーリズム協会 事務局長の吉開氏は説明しています。日本人と外国人とのコミュニケーション環境の改善方法のために、日本人は国をあげて真剣に外国人の日本語教育のことを考えるのも大事。しかしそれよりも大事なのは、日本人自身が、自らのAI 翻訳スキルアップが高めて、日本人が外国人と同じ世間／コミュニティの中に混ざっていくことではないかと考えています。

注目セミナーのご紹介

やさしい日本語こそが、外国人と日本人の混ざる職場における共通言語の最適解

外資系企業、海外展開する企業では、英語が公用語という職場はあるでしょう。しかしながら日本国内で訪日外国人対応で、いろんな国からの多言語のお客さんと対峙しなければいけない”インバウンド職場”では、職場における共通言語は「やさしい日本語」が最適解という場面も多いはず。飲食店業界は、訪日外国人対応と人手不足で外国人アルバイトに依存している業界のひとつです。大阪外食産業協会 常任役員 外国人雇用プロジェクトリーダー 井上 泰弘 氏からは、インバウンド職場で求められる多言語対応とやさしい日本語についての現場ならではのノウハウ、他業界にも横展開できそうな面白いお話を聞かせていただけそうです。「うちのアルバイトは中国人とベトナム人。なんでマニュアルを英語で作らなあかんねん。マニュアルは仕事できるやつにスマホ動画でつくらせたらええんですよ。アルバイト各国言語でのテロップはさすがにいられたあげた方がバイト君もよく理解してくれるね」

今回、7月20日（金）に、AI翻訳ツールの最新事情にも詳しいやさしい日本語ツーリズム研究会 事務局長の吉開氏と、大阪外食産業協会でのやさしい日本語の普及・啓蒙にも積極的な井上氏の対談が企画されています。是非参加をご検討ください。

7/20(金) 13:00 ~ 14:30

AI翻訳は「やさしい日本語」で使いこなす 外国人雇用は「やさしい日本語」で腹をくくれ

やさしい日本語ツーリズム研究会 事務局長 吉開 章 氏

大阪外食産業協会 常任役員 外国人雇用プロジェクトリーダー 井上 泰弘 氏

今後政府は海外人材獲得のため日本語教育を強化、職場の共通語は日本語になります。日本語初学者に分かりやすい「やさしい日本語」は、直接の対話だけでなくリアルタイム自動翻訳ツール使用時の必須スキルとして注目されています。「やさしい日本語」の社会普及を目指す吉開氏と、大阪外食産業協会での技能実習生受け入れで「やさしい日本語」に注目する井上氏の対談にご注目ください。

事前登録は以下のサイトから <https://ers.nikkeibp.co.jp/user/contents/2018y0718gbw/index.html#P32-33F>